

がんゲノム医療の現状と課題 —九州がんセンターでの取り組み—

第74回国立病院総合医学会

江崎泰斗[†] 織田信弥¹⁾ 田口健一²⁾ 益田宗幸³⁾

(2020年10月17日～11月14日

WEB開催)

IRYO Vol. 76 No. 2 (89-93) 2022

要旨

がんゲノム医療連携体制がスタートして2年が経過した。全国に「がんゲノム医療中核拠点病院」、「拠点病院」、「連携病院」が指定され、「がんゲノム情報管理センター(C-CAT)」とともにがんゲノム医療を推進していく体制が構築された。国立病院機構九州がんセンター(当院)は「拠点病院」のひとつである。

当院ではがんゲノム医療統括部を組織し、体制整備とともに自費診療での検査を行ってきたが、2019年6月のがん遺伝子パネル検査保険償還を受けて現在毎月10件近くの検査に対応している。

拠点病院としてがんゲノム医療を進めていくに当たってはいくつかの問題点を感じている。限られたスタッフでの基礎的、臨床的アノテーション、コーディネーター業務などの負担は大きい。データ解析能力の向上と維持、今後の検査数の増加や連携病院の拡大などに対応していくためには、人材育成が急務である。また、当院はこれまでがん診療連携拠点病院として治験に力を注いできたが、このパネル検査の目的が患者に新たな治療薬を見つけることであることを考えると、企業治験や医師主導治験にさらに積極的に取り組む必要がある。そして、新しい医療である「がんゲノム医療」と「がん遺伝子パネル検査」について院内外の医療スタッフ、患者・家族に周知し理解してもらわなければならない。さまざまな機会を利用した勉強会、説明会、病院ホームページでの情報発信などを行っている。さらに、二次的所見(遺伝病の遺伝子変異)への対応も重要である。

多くの課題をはらみながら「がんゲノム医療」がスタートした。国立病院機構九州がんセンターでの経験を踏まえた現状と課題について述べる。

キーワード がんゲノム医療, がん遺伝子パネル検査, がんゲノム医療連携体制

はじめに

がん診療における薬物療法では、従来遺伝子異常としてはヘテロな集団に対して一律の治療(殺細胞

性抗がん薬)を行ってきた。近年がんゲノム医療(Precision Medicine)の進歩により、特定の遺伝子異常に基づいた分子標的薬による個別化治療を行うことで高い効果が期待されるようになり、さらに遺

国立病院機構九州がんセンター 臨床研究センター, 1) 臨床研究センター腫瘍病態研究部, 2) 病理診断科, 3) 頭頸科 †医師

著者連絡先: 江崎泰斗 国立病院機構九州がんセンター 臨床研究センター
〒811-1395 福岡県福岡市南区野多目3-1-1

e-mail: esaki.taito.fz@mail.hosp.go.jp

(2021年3月18日受付, 2021年10月15日受理)

Precision Medicine in NHO Kyushu Cancer Center

Taito Esaki, Shinya Oda, Kenichi Taguchi and Muneyuki Masuda, Clinical Research Institute, 1) Department of Cancer Biology, Clinical Research Institute, 2) Department of Pathology, 3) Department of Head and NHO Kyushu Cancer Center, Neck Surgery.

(Received Mar. 18, 2021, Accepted Oct. 15, 2021)

Key Words: precision medicine, comprehensive genomic profiling, cooperation system of core hospitals.